



「古長禅寺」には修学旅行前の学習などで、市内の多くの小学生が訪れ学習している。

「古長禅寺」は甲西地区鮎沢にある古刹で、南北朝時代の頃に夢窓国師により創建され、師作の庭園などで知られる。山梨県の史跡に指定され、国指定重要文化財の夢窓国師坐像やバクシンなど、古長禅寺の歴史や魅力は豊かである。



500周年を記念し、「大井夫人の墓」の横にある説明板は、南アルプスロータリークラブにより、児童や外国の方向けの新たな説明板を加えられ、再整備されている。



境内には、大井夫人の辞世の句として伝わる「春は花/秋はもみじの/色いろも/日かずつもりて/ちらばそのまま」の歌碑も建てられている。

夫人は天文十(一五四一)年、信虎の駿河退隠には従わず、剃髪して躑躅ヶ崎館北の曲輪に住み、「御北様」と呼ばれます。天文二十(一五五二)年五月七日、五十五才で逝去し、こゝ、鮎沢の長禅寺(現古長禅寺)に葬られたとされます。その葬儀の際に大導師を務めたのも岐秀元伯和尚でした。

その後信玄は、夫人が深く帰依した岐秀元伯和尚を開山として、館のある甲府に現在の長禅寺を建立したため、鮎沢の長禅寺に「古」の字を冠して、「古長禅寺」と称するようになったのです。

大井夫人 信玄公を出産して500年

ふるさと
の170
誇り



博しポート

今年、二〇二二年は、武田信玄公の生誕五百年という節目の年です。一方で、見方を変えると、南アルプス市出身の大井夫人が信玄(となる子)を出産して五百年とも言えるのです。



古長禅寺の本堂北側に佇む「大井夫人の墓」。「宝篋印塔」と呼ばれる中世の石塔の一種。

大井夫人は、甲斐国西郡の雄として知られる武將大井信達(のぶたけ)の娘で、明応六(一四九七)年に生まれました。当時、すでに戦国争乱の時世で、信虎が甲斐国を統一支配しようとしていた頃、大井莊(南アルプス市南部)南巨摩郡北部を領する大井信達が信虎の前に立ちはだかつていました。大井氏はもともと室町時代のはじめに武田氏から分かれた系統で、信達の頃には信虎を凌駕する程の一大勢力を有します。

永正十二(一五二五)年、武田信虎は大群を率いて大井氏を攻めますが、城郭のまわりの深田に騎馬が足をとられ、大敗を喫したとされます。大井氏の城館は櫛形地区上野の椿城とも伝わりますが、この戦いの既述などから、古長禅寺のある鮎沢から古市場の辺り、甲西の大井地区の湿地域にあったと考えられています。

また、大井信達は文化人として知られ、和歌の世界でも広くその名を知られるほど高名で、大井一族は武田氏一門で最も和歌に堪能であったと評されています。鮎沢にある大井氏の菩提寺である長禅寺(現古長禅寺)を大井一族の教育の場としており、大井夫人も漢籍等を受んと伝わります。

信虎と大井の抗争は勝敗つかず、後に和議が成立し、政略結婚によって、夫人は信虎のもとに嫁ぎます。嫡子晴信(信玄)、弟の信繁、信廉や今川義元に嫁いだ晴信の姉を産み育てました。

夫人は晴信をはじめ子どもたちの教育に心を尽くし、幼い晴信ら連れ、躑躅ヶ崎館から鮎沢にある長禅寺に足を運び、住職である岐秀元伯和尚に文武の道を学ばせたとされます。

信玄が戦国武將のなかでも教養人であったことは、残された和歌や語録によって明らかで、信玄の文才を評価する記録も多くあります。また三男信廉は絵画に優れ、大井夫人の肖像画は有名です。こうした教養面は大井の血脈が受け継がれたものと言えるでしょう。